

『神学大全』 翻訳の頃

---

大 森 正 樹

手元にトマス・アクィナス『神学大全』第一冊がある。初版が1960年で、手元のは1962年発行の第三刷である。大学に入ってカトリック学生の集まりに参加したら、これからはトマスを読まなければならないと上級生から言われ、その意味もあまりよく理解しないままに、とにかくトマスの本を買って、目を通さねばならないのだと自分に言い聞かせて、当時三条のカトリック河原町教会にあった書店で上記のものを求めた。以後、ばらばらとめくって見ていたが、これが一体どういう意味で重要なのか、ピンとこなかった。私自身は医学部というおよそお門違いの領域にいたが、先輩・友人には哲学をやろうとしている人が多く、特にカトリック関係者であったので、その専攻する哲学は自然と中世哲学に向かい、その人々が今度は本格的に「トマス」をやりだし、彼らの話しぶりから、自分までトマスの洗礼を受けたような形になった。

1968年に世界的に始まった例の大学紛争時、一早くストライキに入った医学部では当然授業をすることができず、無聊をなぐさめる(?) ためにも、このような先輩、友人が多くいた文学部の演習にもぐりこんで、トマスの演習に出席してみた(後に文学部もやがてストライキに入り、大学では演習ができなくなるのだが)。もちろんこのときトマスの中世哲学や神学における位置、また哲学史の意味など知る由もなかったが、神学大全の各問題や項の中身の説明を受けているうちに、何かどこかで聞いたような話が多々あると思った。その骨組みは考えてみれば、中学のとき受けたいわゆる「公教要理」のそれのようであった。内容的には、もちろん信仰を前面に出した公教要理と、信仰に裏打ちされなが

らも学問という語り口で進む神学大全とでは、その表現や叙述の仕方は当然異なる。一方は結果を告げ、他方はその結果に至る筋道を多様な素材を使いながら、歩いていく。ただそのときはかつて結果として聞いたことが、ここではある種精緻な議論をもって執拗に中心的問題に向かっていくと感じたのである。その説明に拠れば、信仰上の難問が解決への糸口を与えられると思った。そして徐々に刊行される神学大全を揃えていった。それと同時にトマスが神認識についてどう考えるのが、その後の一つの課題とはなった。

刊行された神学大全を前に少しづつ読むという立場から一転して、その翻訳の一端を担うという重い仕事が名古屋に移った自分のところにやがて回ってくるようになった。それは山内得立先生の当時に立案され、高田三郎先生を中心に訳業が進められ、やがて山田晶先生が主として第三部を担当されるようになった頃、九州大学の稲垣良典先生や名古屋大学の大鹿一正先生も訳業の一端を担われるようになった頃である。名古屋では大鹿先生が声をかけてくださり、そのもとに集まったのが故蒔苗暢夫氏、故渋谷克美氏、小沢孝氏、それに小生であった。まず渋谷氏が第22冊を担当することになっていて、彼が訳の草案をもってきたのを、一同が吟味するという形で進んでいった。渋谷氏は相当力を入れて、この翻訳に取り組み、とにかくテキストの引用の指示のあるところすべてを詳しく調べ上げ、それに基づいて訳をしようという考えであったようだ。それでよく註に出て来る、グラティアヌス編『教令集』なども、蒔苗氏に頼んで南山大学から借り出してもらっていた。その結果、彼はトマスの本文の量の何倍もの勉強をしたように思える。多分その勉強を押し広げて、彼の本分とするところのスコトゥスやオッカムに向かって進んでいったと自分は勝手に想像している。

大鹿先生が名古屋大学を定年退官され、南山大学に移られた後は、われわれは皆南山大学の大鹿先生の研究室に集まった。先生はわれわれが疲れた頃あいに、大学にこられる途中で買われた大きな饅頭を出してこられ、これをわれわれに振舞われた。渋谷氏などは先生に勧められて沢山食べた方である。先生はお茶の煎れ方には一家言があり、私の煎れるものは煎れたうちに入らないのであった。ところで渋谷氏の担当部分が終わり、次は私と小沢氏の番（第17冊）になった（手元にある翻訳ノ

一トの日付によれば、1987年7月29日から翻訳を開始したことになる。みんなで検討しはじめたのは、これよりもっと後、出版して陽の目を見たのは1997年である)。あらかじめ下訳を作ってもっていき、逐次検討するのであるが、神学上の問題などでは、内容がすぐに掴めないことが多く、あれこれ考えたり、迷ったり、簡単に進めることができず、難渋した。いよいよ神学科教員の蒔苗氏の出番であるが、私の訳などを蒔苗氏がじい〜と眺めて、考えて、「ま〜いいか」と言わなければ、先へは進めないのであった。私の訳のところで訳語をどうするかでずいぶん時間をとったのは、“acedia”である。これまでの『神学大全』中の訳語では「怠惰」「(靈的)怠惰」(トマス・アクィナス『神学大全』語彙集(羅和))となっている。要するに修道士が祈りに飽き、ものうく鬱状態になって、靈的修行が頓挫してしまうことなのだ。こうしたこれまでの諸先生方の訳をも参照しつつ、いくつかの候補を挙げて検討したが、なかなかこれがびったりだという決断に至らない。それでペンディング状態が長く続いた。しかしある時、大鹿先生がこれにしようとして提示されたのは、「慵懶」という言葉だった。これは考えたことも見たこともなかった言葉であるから、いったいこの意味は何ですかと問うと、「ものうい」とか「だるい」ということだと言われる。確かに辞典にはそうある。そしてこの言葉は南山大学の漢文学の山本和義先生と相談し、教えてもらったものだと言われる。馴染みのない言葉で大分とまどって、これについても議論があったが、acedia という語はこうして「慵懶」に落ち着いた。その後しばらく「ようらん」「ようらん」という音が生耳の中に持続的に鳴り響いていたものである。

しかし東方教会の修道靈性を問題とすると、きまって *ἀκηδία* が出てくるのだが、この *acedia* に拘ったお陰で、エヴァグリオスやカッシアーヌス、そして教皇グレゴリウス一世の考えを比較検討する機会に恵まれたし、その後の『フィロカリヤ』中のテキストを扱うときに大いに助けになった。それはこの訳業で苦心したことが基になっている。

またもう一つ問題になったのは“scandalum”である。スキャンダルなどとよく見知った言葉であるが、何と訳したものか、たんに「躓き」でいいのかが議論になった。ギリシア語原意に近づけ、能動的躓きと受動的躓きの区別も考慮して、「躓き」ではなく、「躓きとなるも

の」という語にすることになった。ある具体性をともなった語であることを考慮した結果である。小さいことのように見えるが、案外重要な問題なのかもしれない。

さて大鹿先生は私の下訳を、提出の次の回にはまことに丁寧に朱を入れられて——ということは徹底的に訳を改められたのである——返された。多分これはかつて高田三郎先生のもとの、スンマの訳にどこまでも朱を入れられた経験から（山田晶先生からもそれはすごかったと聞いていた）、そうすることが結局は正確な訳をすることになるという信念からなされたことであろう。朱色の、あるときは青いペンの訂正文を眺めて、初めはこれから先どうなるのだろう、まともに訳業ができるのかと、まことに暗澹たる気持ちではあったが、不正確な訳をつけていたこともあり、また訂正部分の訳を連ねていくことで、一つの筋の通った、まとまりのある訳文が出来上がっていくことは、それなりの整合性をもっているように思えるようになった。しかし時々、「君の訳は分かりやす過ぎる」と言われ、それには大いに戸惑ったが、これも簡単・単純そうに見えるトマスの文章を底から解釈していく必要のあることを教えられたと考えると、合点のいくものでもあった。確かにトマスの言葉は、曖昧という意味とは異なる地平での、安易な理解を阻むものをもっていき、重層的な理解を要することから、簡単な割り切り方をするのではないということであろう。

ところで担当した部分は第二-二部の第34~44問題であるが、ここで扱われている主題は「憎しみ」「慵懶」「嫉妬」「不和」「争論」「教会離脱」「戦争」「闘争」「内乱」「躓き」などである。一見してあまり楽しくない主題ばかりである。人間の負の側面の考察と言えれば格好がつくかもしれないが、それでも気鬱になるテーマだ。しかしこれらの主題はトマスの第34問題の序文によれば、すべて愛（*caritas*）に対立する諸々の悪徳（*vitium*）であるという。ということは負の側面の考察は正の側面（徳 *virtus*）の考察を前提しているわけで、この徳の認識がないために、われわれ人間は問題を起こすのだということになる。たとえば憎しみは *dilectio* という意味での愛に対立するものだと言う。すると「愛」とは何かが問題になり、愛には四通りの語（*caritas, dilectio, amor, amicitia*）があることがわかってくる。それら相互の関係を推し量っていくとき、

トマスの愛に対する思想の重層性が明らかになっていく。中でも caritas と amor は互いに背馳し合うものではなく、amor が根底的であり、神と人間との間では dilectio に比べ、受動的と思われる amor の方がよりよく神に向かうことができ、より神的でさえあるという認識には目を啓かせるものがあった。それは自分の中でその後「愛」を考えていく上でも、重要なポイントとなっていた。

また第 44 問題で愛にかかわる規定や序列を知ったことも、新鮮な驚きだった。普通は愛には隔てがないように思われ勝ちだが、そう単純ではないのであった。問題は、当然人間は神への愛を第一等の地位に置くとしても、現実生活上、われわれには肉親や友人や隣人がいるし、そうした諸々の人々への愛の行使（たとえばある人を他の人よりも愛すべきか）はどうあるべきか、ということである。これについてもトマスは先ほどの愛の四通りの言葉に基づいて、精緻な議論を展開している。それは具体を目指しつつ、抽象的作用によって、その根底を押さえるという手法である。トマス流と言われるかもしれないが、西欧キリスト教の「愛」の捉え方には、表面的な情緒に流れていかないという厳しい態度があると思われる。

ともかく山あり、谷ありの訳業を小沢氏とともに終え一安心をしたが、確かに翻訳の作業はその中身よりも、むしろ中身が現実化してくるまでに、色々調べ、苦しみ、悩み、討議していく過程に意味があると思う。そんなものを読まされてはかなわないという読者の声が出ないためにも、翻訳作業には細心の注意が必要である。

この度、ようやく五十年以上に及ぶ『神学大全』の翻訳が終了し、トマスの主著はこれで日本語に移し変えられたが、その他の重要な著作はまだ十分に知られていない。そうした残りの著作の翻訳は是非とも必要で、そのような仕事になされることを望みたいが、トマスの著作には表に現れたものの奥に膨大な西洋の知が腹蔵されていることを強く感じずにはいられない。それはたんに神学とか哲学とか、あるいはそれらの色々な学派といったある個別領域の問題ではなく、人間にとって普遍的に妥当する知の世界である。トマスの探究者がそれを掬い取るためには、すでにある訳書等を通して、そしてさらにそれを超えて歩まねばならないのではないかと考える。